

英国週刊紙のスポーツジャーナリズムに関する一考察 A Study on Sports Journalism of Regional Weekly Newspapers in the United Kingdom

松実 明¹
Akira MATSUMI

¹ 上智大学院 文学研究科 新聞学専攻博士後期課程
Doctoral Program in Journalism, Graduate School of Humanities, Sophia University

要旨・・・本研究は、英国地方週刊紙のスポーツジャーナリズムの機能と役割を考察する。このスポーツジャーナリズムの機能には、週刊紙が住民同士の交流を助けるメディアとして、地域コミュニティの形成や維持、スポーツ文化の発展を支える働きがあると考えられる。一方、その役割には、全国紙などのスポーツジャーナリズムからこぼれ落ちた地域スポーツを掘り起こして、スポーツをする人々を喜ばせること、地域住民に話題を提供することが期待されている。

キーワード スポーツジャーナリズム、スポーツ報道、イギリス、地域メディア

1. 研究の目的と定義

(1) 研究の目的

本研究は、イギリスで発行されている地方週刊紙 (regional weekly newspaper) のスポーツジャーナリズムの機能と役割を考察することを目的とする。

イギリスは近代スポーツ発祥の地である。18世紀に入ると、近代スポーツの萌芽がみられ、18世紀中頃からはスポーツ報道がみられるようになった。19世紀になるとスポーツジャーナリズムが成立し、『ベルズ・ライフ・イン・ロンドン』(1822年創刊)などのスポーツ専門紙の創刊が相次いだ。しかしスポーツ新聞は、1900年までに一般紙のスポーツ欄が充実するようになるとその役目を終えた。その後は一般紙が新聞のスポーツジャーナリズムを担った。

イギリスでは日刊紙のほか週刊紙も発行されている。週刊紙は日刊紙やテレビ、ましてインターネットに比べて速報性はない。また週刊紙のスポーツ欄はスポーツ専門誌に比べて内容は劣る。しかし週刊紙のスポーツ欄には人々の一定の需要がある。なぜ、週刊紙のスポーツ欄は、速報性と専門性に劣るにも関わらず読まれているのだろうか。

これまでジャーナリズム研究、メディア研究では、ジャーナリズムの活動と組織の様式は、メディアごとに異なると指摘されてきた。たとえばピーター・コールとトニー・ハーカップは newspaper journalism を検証した¹。またティム・ホームズとライザ・ナイスは magazine journalism の特徴を明らかにした²。これらは、それぞれのメディアに特有のジャーナリズムの活動と組織の様式があり、その機能と役割は多様であることを示唆している。同様にスポーツジャーナリズムの活動と組織の様式もメディアごとに特徴を有する。たとえばフィル・アンドリュースは、新聞、ラジオ、テレビ、ウェブごとに特有なスポーツジャーナリズムがあることを指摘した³。したがって、週刊紙にも独特なスポーツジャーナリズムがあるのではないだろうか。

本研究は、そのような問題意識を基にスポーツジャーナリズムを「活動」として見る視座と「組織」として見る視座に依拠して、英国週刊紙のスポーツジャーナリズムの実態の一端を明らかにするため、『ストラトフォード＝アポン＝エイヴオン・ヘラルド』(Stratford-upon-Avon Herald, 1860+)と『ザ・オックスフォード・タイムズ』(The Oxford Times, 1862+)を研究対象にして、それぞれのスポーツ部編集長に対してインタビュー調査を行い、そのスポーツジャーナリストの仕事に対する意識を見ていくこととする。そして本調査から得られた知見を手がかりにして、調査対象紙のスポーツジャーナリズムには、「活動」の視座からどのような「機能」があるのか、また「組織」の視座からどのような「役割」があるのかを考察する。

¹Peter Cole & Tony Harcup, *Newspaper Journalism* (London: SAGE Publications Ltd, 2010).

²Tim Holmes & Liz Nice, *Magazine Journalism* (London: SAGE Publications Ltd, 2012).

³Phil Andrews, *Sports Journalism 2nd EDITION* (London: SAGE Publications Ltd, 2014), pp.2-3.

(2) 概念定義

スポーツジャーナリズムとは何か。黒田勇は、スポーツジャーナリズムとは「競技の経過や成績、選手の状況を中心としたスポーツ現象全般にわたる客観的な報道」⁴と定義した。山本浩は、「ジャーナリズムがスポーツを取り上げるようになるのは、スポーツの愛好者たちが第三者の目を意識するようになってから」であり、スポーツジャーナリズムとは、「あるときは勝ちたい、あるときは強さを誇りたい、そしてまたあるときは美しさを見せたい。それぞれのスポーツが、しのぎを削ってその夢を実現しようとしたとき、準備から結果に連なる過程」を伝えることで、「社会的正義や遵法精神、倫理観やスポーツ観をもとに原稿やレポート、作品といった形で示され」た批判と論評であると定義した⁵。玉木宏之は、スポーツジャーナリズムとは、①スポーツ情報を伝達すること、②スポーツ界の発展のためにスポーツを批評・批判すること、③スポーツを主催して見せて啓蒙することと定義した⁶。

ところでスポーツジャーナリズムは、ジャーナリズムとまるで異なる概念なのか。スポーツジャーナリズムは、商業主義に基づき、娯楽の提供である点が強調されてきた。またメディアとスポーツとの近過ぎる関係に基づき、スポーツジャーナリズムの形骸化も指摘されている⁷ことから、スポーツジャーナリズムのジャーナリズム機能には疑問がある。しかし、「ジャーナリズムは、公的な問題に関する調査報道からスポーツ記事を書くことまでを包括している (It can cover everything from investigative journalism in the public interest to writing a description of a sporting encounter)」⁸ことや「スポーツ欄、スポーツ速報は、試合結果を伝えるばかりではなく、多くのジャーナリズムの基本原則を踏襲している (Sports pages and bulletins include match reports but also draw on many of the standard elements of journalism)」⁹ので、スポーツジャーナリズムは、ジャーナリズムのひとつであると考えられる。

ジャーナリズムの定義は多岐にわたる。たとえば清水幾太郎は、ジャーナリズムとは、「一般の大衆にむかって、定期刊行物を通じて、時事的諸問題の報道および解説を提供する活動」と定義した¹⁰。このほかには、新聞、雑誌などの「メディアをジャーナリズムと呼ぶこともあり、またジャーナリズムはマス・メディア活動の担い手としての新聞社、出版社、放送局などを指すこともある¹¹。したがって、本発表では、スポーツジャーナリズムとは、スポーツ現象全般にわたる報道、批判、論評、啓蒙などを行う活動の総称およびその活動を営む新聞社、出版社、放送局などの組織と定義する。

2. 研究の方法

(1) 調査概要

・調査対象紙

調査対象紙は、『ストラトフォード＝アポン＝エイヴオン・ヘラルド』（以下、ヘラルド）、『ザ・オックスフォード・タイムズ』（以下、タイムズ）、『オックスフォード・メール』（以下、メール）の3紙である。

【図表 1】 調査対象紙の一覧表

	ストラトフォード＝アポン＝エイヴオン・ヘラルド <i>Stratford-upon-Avon Herald</i>	ザ・オックスフォード・タイムズ <i>The Oxford Times</i>	オックスフォード・メール <i>Oxford Mail</i>
創刊年	1860年	1862年	1928年
発行日	毎週木曜日	毎週木曜日	日刊
価格	65ペンス	15ポンド	65ペンス
発行部数	14000部(自社公称)	11,770部(ABC)	33000部(自社公称)
配布地域	イングランド・ウォリックシャー州南部	イングランド・オックスフォードシャー州	オックスフォード市
新聞社	ジョージ・ボイデン&サン社 George Boyden & Son Ltd	ニューズクエスト・オックスフォードシャー&ウィルトシャー社 Newsquest Oxfordshire & Wiltshire	

・調査対象地域のスポーツ文化の概要

⁴黒田勇「スポーツジャーナリズム」武田・藤田・山田（監修）『現代ジャーナリズム事典』（2014年、三省堂）、pp.159-160。

⁵山本浩「スポーツ・ジャーナリズム」井上・菊（編著）『よくわかるスポーツ文化論』（2012年、ミネルヴェア書房）、pp.20-21。

⁶玉木宏之『スポーツシステム講座3 スポーツジャーナリズムを語る』（2003年、国土館大学体育・スポーツ科学学会）、pp.34-41。

⁷野原仁「メディアとスポーツ」渡辺・山口・野原（編）『メディア用語基本事典』（2011年、世界思想社）、pp.102-103。

⁸Tony Harcup, *Journalism, A DICTIONARY OF Journalism* (Oxford: Oxford University Press, 2014)。

⁹Ibid/

¹⁰清水幾太郎『ジャーナリズム』（1949年、岩波書店）、p.28。

¹¹武田徹「ジャーナリズム」武田・藤田・山田（監修）『現代ジャーナリズム事典』（2014年、三省堂）、pp.118-119。

ストラトフォード＝アボン＝エイヴオン（人口約 25,000 人¹²）とオックスフォード（人口約 150,000 人¹³）には、ともにプロスポーツとアマチュアスポーツを問わず、スポーツが盛んな土地柄がある。まずストラトフォード＝アボン＝エイヴオンのプロスポーツチームには、ストラトフォードタウン FC がある。これは、1941 年に創設したフットボールクラブチームである¹⁴。

ストラトフォード＝アボン＝エイヴオンのアマチュアスポーツでは、特にラグビーとクリケットが有名である。まずラグビーには、ストラトフォード＝アボン＝エイヴオン RFC（1877 年設立）がある。これは、イングランドで最古のラグビークラブの一つである¹⁵。次にクリケットにはストラトフォード・クリケットクラブがある。これは、1894 年 6 月 2 日に設立したウォリックシャー州で最も歴史のある名門クリケットクラブである¹⁶。このほか毎年 4 月に開催されるシェイクスピアマラソンは町の年中行事になっている¹⁷。

一方、オックスフォードには、2つのプロフットボールクラブがある。まずオックスフォード・ユナイテッド（以下、ユナイテッド）は、1893 年 10 月 27 日に創設した。2015 - 2016 シーズンは 4 部リーグに参戦しているが、過去には、1985 - 1986 シーズン～1987 - 1988 シーズンの 3 季は、現在のプレミアリーグ¹⁸に相当する 1 部リーグに参戦していた歴史もある¹⁹。つぎにオックスフォード・シティー（以下、シティー）は、1882 年に創設した。2015 - 2016 シーズンは 6 部リーグに参戦している²⁰。

さまざまなスポーツが町の全域で楽しまれているが、オックスフォード博物館の展示によれば、町の南部は特にスポーツが盛んな土地柄をもつ。南部には、ユナイテッドのホームスタジアム（Kassam Stadium）がある。ボート競技は、1821 年から続くオックスフォード大学とケンブリッジ大学の漕艇が有名である。筆者が滞在したモードリンカレッジは、バンティング（Punting）や漕艇を楽しむことが出来るチャーウェル川（River Cherwell）に接しており、またキャンパス内の施設には、歴代の漕艇に関する資料（オール、フラッグなど）が展示され、これらのスポーツ資料は漕艇の歴史を物語っていた。クリケットは HCPL（Home Counties Premier Cricket League）が有名である²¹。

(2) 研究の方法

2015 年夏、オックスフォード大学にてイギリスのスポーツジャーナリズム等に関する研究を行った。本研究は『ヘラルド』、『タイムズ』、『メール』を調査対象にして、各紙のスポーツジャーナリストの仕事に対する意識を見ていくため、現地滞在中に『ヘラルド』のスポーツ記者兼スポーツ部編集長のマット・ウィルソン氏（当時）にインタビュー調査を行った。また『タイムズ』と『メール』のスポーツ部編集長のマーク・エドワーズ氏（当時）にはメールによる方法でインタビュー調査を行った。

3. 得られた知見

(1) 調査結果

・『ヘラルド』とスポーツ報道

『ヘラルド』は創刊以来、週刊高級紙として卓越した論説記事、写真付き記事、地元小売業者の商業的發展を忠実に描写する経済記事を得意とし、地域情報を掘り起こして地域社会の声を代弁してきた。新聞社の方針は、伝統的な質の高いジャーナリズムに徹して、読者に今後の町のビジョンと戦略を分かりやすく明確に提示することである。

スポーツ部の規模は小さく、1名のスポーツ記者兼編集長が取材から新聞記事執筆とスポーツ面の編集作業まで行う。また本紙と姉妹紙のスポーツ部は統合され、さらに 2010 年からは新聞社のウェブサイトとソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）に配信するインタビュー映像と試合映像の撮影と編集までも行わなければならなくなった。したがって組織体制は決して恵まれていないが、全国紙、全国規模の放送メディア、スポーツ専門チャンネルに比べて、地域スポーツ情報に関しては、量と質ともに『ヘラルド』の方が勝っているという自負を持つ。

¹² ストラトフォード＝アボン＝エイヴオンタウン公式ホームページ、<http://www.stratford-upon-avon.co.uk/> 閲覧日 2016年5月26日。

¹³ オックスフォード市公式ホームページ、<http://www.oxfordcity.co.uk/> 閲覧日 2016年5月26日。

¹⁴ ストラトフォードタウン FC 公式ホームページ、<http://www.stratfordtown.net/Default.aspx> 閲覧日 2016年3月28日。

¹⁵ ストラトフォード・アボン・エイヴオン RFC ホームページ、<http://www.stratforduponavonrugbyclub.co.uk/> 閲覧日 2016年1月4日。

¹⁶ ストラトフォードクリケットクラブホームページ、http://stratfordplay-cricket.com/website/web_pages/89285 閲覧日 2016年1月4日。

¹⁷ シェイクスピアマラソン大会公式ホームページ、<http://www.shakespearemarathon.org.uk/> 閲覧日 2016年3月23日。

¹⁸ 「FA プレミアリーグ」は 1992 年に設立した。「FA プレミアリーグ」は、2007 年に「プレミアリーグ」に改称した。

¹⁹ オックスフォードユナイテッド公式ホームページ、<http://www.oxfc.co.uk/> 閲覧日 2016年3月28日。

²⁰ オックスフォードシティー公式ホームページ、<http://www.pitchero.com/clubs/oxfordcityfc> 閲覧日 2016年3月28日。

²¹ HCPL 公式ホームページ、<http://www.hcpcl.com/> 閲覧日 2016年3月28日。

取り上げるスポーツはプロスポーツとアマチュアスポーツに区別することができる。まずプロスポーツでは、ストラトフォードタウンFCを取り上げる。ストラトフォードタウンFCは、2015 - 2016のシーズンを8部リーグで戦うから強豪クラブとは言えず、またマンチェスター・ユナイテッド（1878年創設）などに比べればその歴史は浅い。しかし、ストラトフォードタウンFCは、地域住民の関心事になっている。『ヘラルド』は、地域メディアとして読者のニーズに応えるため、戦評記事、新加入選手や監督コーチ人事の予想記事を得意とする。

『ヘラルド』の読者は概ね全国紙を併読している。全国紙のフットボール報道は、プレミアリーグのクラブを中心に取上げており、8部リーグのストラトフォードタウンFCを扱うことはめったにない。したがって『ヘラルド』のスポーツジャーナリズムは、ストラトフォードタウンFCのニュースを知りたいという読者のニーズに応えている。

『ヘラルド』は地域のアマチュアスポーツに特化し、その情報量で他のメディアの追従を許さない。『ヘラルド』は、プロスポーツばかりでなく、アマチュアスポーツにも十分な紙面を割り当てて報道して、このスポーツジャーナリズムは、地域住民に対して大きな役割を果たしている。人口 25,000 人程度の町では、フットボール、ラグビー、クリケットのアマチュアチームに参加する住民の割合が高い。したがって自分自身はチームに参加したことが無くても、今現在チームに参加しているか過去にチームに参加していた友人、知人がいる。新聞に書かれた自分、家族、兄弟姉妹、友人、知人が参加したスポーツの記事は、住民に地域社会の人間関係を維持するために欠かせない重要な話題を提供する。

『ヘラルド』は、住民が参加したスポーツを大小に関わらず取材し、取材から得られたスポーツ情報、新聞社に寄せられたスポーツ情報は紙幅の許すかぎり紙面に掲載する。したがって住民は、新聞記事を読んで、友人、知人のスポーツ情報を知り、地域社会の人間関係を維持するために欠かせない話題を共有できる。これは『ヘラルド』の大きな特徴であり、新聞購読を支える要因の一つになっている。

・『タイムズ』と『メール』のスポーツ報道

ニューズクエスト・オックスフォードシャー&ウィルトシャー社²²は、地元メディアとして、地域社会のなかで大きな役割を果たしている。新聞の発行のほかにスポーツにも関与し、少年少女ジュニアフットボールリーグを後援するとともに、ユナイテッドと公式クラブパートナー契約を結んでいる。

『タイムズ』と『メール』のスポーツ部は統合されており、その部員数は総勢7名。内訳は、編集長と副編集長がそれぞれ1名ずつ、記者が5名いる。記者のうち4人には専門分野がある。それはユナイテッド担当記者、ラグビーと陸上競技担当記者、競馬担当記者、アマチュアフットボール担当記者である。

スポーツ部の編集方針は、スポーツ部の記者が日々地道な取材活動を通じて、地域のスポーツ情報を知りたい人々を満足させられるように、どのメディアよりも詳しくオックスフォードシャー州のスポーツを取り上げることである。2紙は、オックスフォードシャー州のスポーツに興味があり、地域スポーツ情報を収集したい人々にとって、最適な新聞であることを目指している。

読者の関心が高く、ニュースバリューがある出来事とは、地元チームの優勝、地元出身者・地域住民の記録達成などの偉業であるが、実際のところはこのようなニュースは少ない。したがって、ニュースを安定して供給するユナイテッド、シティー、クリケット HCPCL を好んで取り上げる。また地域住民にはユナイテッドのファンが多いため、ユナイテッドのニュース価値は他に比べて高い。

『タイムズ』の読者は概ね日刊紙を併読している。その併読パターンには、『タイムズ』と全国紙の組み合わせのほかに『タイムズ』と『メール』の組み合わせもある。したがって『タイムズ』と『メール』の間ではスポーツジャーナリズムの役割分担を行っている。

『メール』のスポーツ欄は、プロスポーツを重視している。アマチュアスポーツでは、地元出身者・地域住民が出場した全国大会、国際大会などが好まれる。

『タイムズ』が取り上げるスポーツもプロスポーツとアマチュアスポーツに区別することができる。まずプロスポーツでは、『タイムズ』のスポーツ欄もユナイテッドとシティーを取り上げる。記事では、1週間の戦績、チームの動向を振り返る。『タイムズ』は、2つの目的からプロスポーツを扱う。1つ目は、現在、全国紙がユナイテッドとシティーを取り上げることはめ

²²ニューズクエストオックスフォードシャー&ウィルトシャー社 (Newsquest Oxfordshire & Wiltshire) は、ニューズクエストメディアグループ (Newsquest Media Group) の傘下に入っている。ニューズクエストメディアグループは、イギリス最大の地方ニュースを専門に扱うメディアグループで、2016年4月30日現在、合計234タイトルの地方紙と雑誌を傘下に収める (Newsquest 公式ホームページ、<http://www.newsquest.co.uk/>、閲覧日2016年5月10日)。

たにないから、日頃は全国紙を購読する読者向けにユニテッドとシティーに関する情報を提供することである。2つ目は、週刊紙の『タイムズ』には日刊紙の『メール』やラジオ、テレビ、インターネットのような速報性はないが、1つの事柄を他の媒体よりも時間をかけて取材することができるため、『メール』が取り上げたスポーツを深く掘り下げることである。つまり『タイムズ』のスポーツジャーナリズムは、プロスポーツを取り上げる際には、全国紙のスポーツジャーナリズムを補完しており、また解説機能と評論機能を重視して『メール』との差別化を図っていると考えられる。

次にアマチュアスポーツでは、『タイムズ』のスポーツ欄もさまざまなスポーツを取り上げる。両紙は、読者から地域のアマチュアスポーツ情報を取り上げることが期待されている点で共通しているが、『メール』は特異性を重視するのに対して、『タイムズ』は網羅性に重きを置いている。たとえば『タイムズ』は、1頁すべてを割り当てて、その週に行ったスポーツ同好会の試合結果だけを羅列してまとめたページがある。この記事は、チーム名とスコアだけを記載した文字だけの記事で、一見すると、読者を惹きつける要素が見当たらない。ところがこの記事は読まれている。なぜならば、この記事は、かなりの割合で地域内の同好会の試合結果を網羅しているからである。『タイムズ』のスポーツ欄は、自分や友人、知人などが参加するチームの試合結果を一覧できるメディアである。したがって『タイムズ』のスポーツジャーナリズムは、アマチュアスポーツを取り上げる際には、素晴らしい記録や勝利などの特異性よりも、地域のスポーツ同好会の試合結果など身近なスポーツ情報も取り上げる網羅性を重視する。

・小括

『ヘラルド』と『タイムズ』のスポーツ欄は、他のメディアに比べて速報性と専門性に劣るが、町の人々が参加したアマチュアスポーツに特化して他のメディアとの差別化を図っている。読者自身、家族、兄弟姉妹、友人、知人が参加したスポーツは話題にのぼるため、調査対象紙は、そのスポーツ情報を取り上げるから地域社会のなかで欠かせないメディアになっている。

調査対象紙は地元のプロチームに読者の関心があるからプロスポーツも扱うが、スポーツジャーナリズムはチームを批判することもある。たとえば、ユニテッドとメディアの関係はいつも蜜月とは限らない。『タイムズ』と『メール』は、チームが誤った決定をしたときには、その決定に抗議する²³。その一方で、プロチーム、スポーツ競技団体は重要なニュースの供給源になっている²⁴。実際に、調査対象紙は、アマチュアスポーツのみでスポーツ欄の全てを構成することが難しいからプロチームが提供するニュースに依存している。

さて、調査対象紙にみられたスポーツジャーナリズムの様式は英国週刊紙に限られる様式だろうか。近年、日本の全国各地で地元密着型スポーツ雑誌の創刊が相次いでいるが、これまでに得られた地元密着型スポーツ雑誌のスポーツジャーナリズムに関する知見を参照すると、この雑誌には調査対象紙と同様のスポーツジャーナリズムがみられる。もちろんイギリスと日本との間には文化的、社会的に異なる価値観が存在し、両国のスポーツジャーナリズムを単純に比較することはできない。しかし、調査対象紙のスポーツ欄と日本の地元密着型スポーツ雑誌の間には、いくつかの共通項がみられた。具体的には、①地元のプロチームに読者の関心（人気）があるからプロスポーツを扱うが、この雑誌はプロスポーツよりもアマチュアスポーツを重視すること、②老若男女は問わない地域住民のスポーツを扱うことが雑誌の購読に結び付くこと、③この雑誌のスポーツジャーナリズムがスポーツ文化の発展に貢献していることである²⁵。これらの要素が調査対象紙のスポーツ欄と日本の地元密着型スポーツ雑誌の間で共通している。したがって調査対象紙のスポーツジャーナリズムは、必ずしも英国週刊紙に限られるものとは言えない。

(2) 考察と結論

スポーツジャーナリズムには速さと正確さが求められる²⁶。したがって、速報性はスポーツジャーナリズムを評価する重要な尺度のひとつである。だが速報性の劣るメディアが必ずしもスポーツジャーナリズムも劣るとは言い切れない。たとえば雑誌は、週刊紙同様に速報性が劣るメディアである。しかし雑誌は他のメディアに比べて専門性に長けている²⁷。スポーツ雑誌は、読者層を絞ったより専門的な内容を扱って、専門的な知識や情報を求める読者に応えている。スポーツ雑誌は、新聞、テレビよりも時間をかけて取材することが許されるので、新聞、テレビが取り上げたスポーツをさらに深く掘り下げるができる²⁸。

²³ Martin Brodetsky, *Oxford United Miscellany* (Dumington: Pitch Publishing Brighton Ltd, 2010) p.98.

²⁴ Tony Harcup, *Journalism principles & practice second edition* (London: SAGE Publications Ltd, 2013) p.75.

²⁵ 松実明「地元密着型スポーツ雑誌の創刊要因に関する一考察 - 『山梨スピリッツ』を例にして -」日本マスコミュニケーション学会 2015年度研究発表（平成27年10月31日、文教大学）。

²⁶ James Toney, *Sports Journalism The Inside Track* (London: Bloomsbury Publishing Plc, 2013) p.42.

²⁷ Angela Smith & Michael Higgins, *The Language of Journalism A multi-genre Perspective* (London: Bloomsbury Publishing Plc, 2013) p.49.

²⁸ 谷口輝世子「スポーツと雑誌」中村・高橋・寒川・友添（編）『21世紀スポーツ大辞典』（2014年、大修館書店）、p.771.

週刊紙も日刊紙より時間をかけて取材することができる。たとえば『タイムズ』は、『メール』が取り上げたユナイテッド、シティーなどを深く掘り下げていた。しかし週刊紙のスポーツ欄は、スポーツ雑誌のように首尾一貫して読者層を絞ったより専門的な内容を扱っているとは言い難い。なぜならば『ヘラルド』と『タイムズ』のスポーツ欄は、スポーツに詳しい読者はもとよりスポーツに詳しくない読者も対象にしているからである。したがって週刊紙のスポーツ欄は、スポーツに詳しくない読者にも読まれるものでなければならない。

週刊紙のスポーツ欄の特徴は他のメディアに比べて網羅性に長けていることである。週刊紙のスポーツ欄は、地元のプロチームから他のメディアに取り上げられる機会が少ないスポーツクラブの活動まで扱う。この網羅性の方針は商業主義に結びつく。たとえば、週刊紙のスポーツ欄に自分、家族、兄弟姉妹が取り上げられる。それは、スポーツをする人々とその親族が週刊紙を購読する要因の一つになっている。

またスポーツに詳しくない読者が週刊紙のスポーツ欄を読む動機の一つには、友人、知人が参加したスポーツのニュースを収集する目的がある。スポーツは話題にのぼるため、スポーツに詳しくない人でも地域社会の人間関係を維持するために必要最低限なスポーツ情報として友人、知人が参加したスポーツ情報を共有する必要がある。

もちろん今日では、新聞社、スポーツ同好会、競技団体がインターネット上にウェブサイトを開発、Twitter、Facebook、YouTube など SNS のアカウントを取得して、それらを使って試合結果などの情報を配信している。したがって町の人々は、週刊紙のスポーツ欄を読まなくてもインターネット上のサービスを通じて友人、知人のスポーツ情報を共有できる。しかし町の人々は、いくつものウェブサイト、SNS に散らばる友人、知人のスポーツ情報をもらさず収集することは困難であり、これらの情報を一元化するメディアを必要としている。その点、町の人々は、週刊紙のスポーツ欄を読めば、友人、知人のスポーツ情報を一度に知ることができ、地域社会の人間関係を維持するために欠かせない話題を共有することができる。これは週刊紙のスポーツ欄の特徴であり、新聞購読を支える要因の一つになっている。

ここまでの議論を踏まえて、週刊紙のスポーツジャーナリズムの機能には、週刊紙が住民同士の交流を助けるメディアとして、地域コミュニティの形成や維持、スポーツ文化の発展を支える働きがあると考えられる。一方、その役割には、全国紙などのスポーツジャーナリズムからこぼれ落ちた地域スポーツを掘り起こして、スポーツをする人々を喜ばせること、地域住民に話題を提供することが期待されていると考えられる。

いずれの国でも通常、スポーツジャーナリズムの文化は、その国のメディア制度、ジャーナリズム文化、スポーツ文化に依存している。したがって、その国のスポーツジャーナリズムの機能と役割は固有であるはずだ。ところが、日本のスポーツジャーナリズムを参照すると、イギリスと日本では、メディア制度、ジャーナリズム文化、スポーツ文化が全く異なるにも関わらず、英国週刊紙のスポーツ欄と日本の地元密着型スポーツ雑誌の間にはスポーツジャーナリズムの共通項がみられた。もちろんイギリスと日本のスポーツジャーナリズムを単純に比較することはできない。しかし、この共通項は、他のメディアに比べて速報性と専門性に劣るローカルなスポーツジャーナリズムの一般化の可能性を示唆するのではないだろうか。

主要参考文献

Angela Smith & Michael Higgins, *The Language of Journalism: A multi-genre Perspective* (London: Bloomsbury Publishing Plc, 2013)

James Toney, *Sports Journalism: The Inside Track* (London: Bloomsbury Publishing Plc, 2013)

Phil Andrews, *Sports Journalism 2ND EDITION* (London: SAGE Publications Ltd, 2014)

Peter Cole & Tony Harcup, *Newspaper Journalism* (London: SAGE Publications Ltd, 2010)

Tim Holmes & Liz Nice, *Magazine Journalism* (London: SAGE Publications Ltd, 2012)

Tony Harcup, *Journalism: principles & practice second edition* (London: SAGE Publications Ltd, 2013)

Rob Steen, *Sports Journalism: A Multimedia Primer* (New York: Routledge, 2015)

黒田勇『メディアスポーツへの招待』ミネルヴァ書房、2012年。

黒田勇「スポーツジャーナリズム」武田・藤田・山田（監修）『現代ジャーナリズム事典』三省堂、2014年。

谷口輝世子「スポーツと雑誌」中村・高橋・寒川・友添（編）『21世紀スポーツ大辞典』大修館書店、2014年。

玉木宏之『スポーツシステム講座3 スポーツジャーナリズムを語る』国士舘大学体育・スポーツ科学学会、2008年。

野原仁「メディアとスポーツ」渡辺・山口・野原（編）『メディア用語基本事典』世界思想社、2011年。

山本浩「スポーツ・ジャーナリズム」井上・菊（編著）『よくわかるスポーツ文化論』ミネルヴァ書房、2012年。